

新潟県における縄文時代墓制の基礎資料集成

—遺物出土土坑を中心に—

加 藤 元 康

1 本稿の目的

墓制研究において墓の認定は重要であり、確実に断定できる条件は人骨の出土であることは、多くの方々が指摘している通りである。しかし、太平洋側に比べて大規模な貝塚が展開しない新潟県において縄文人骨が出土することは特別な状況が生じないと望めない。縄文時代の墓制研究が配石墓や土坑墓などを集成し、検討する作業が全国各地で行われ、地域の様相もまともりつつある一方で、出土人骨を人類学と共同研究することで進展している。貝塚が少ないという本県の特徴を考慮すると人骨出土の事例の他に遺構の痕跡から墓を抽出し、基礎的な情報の把握が重要と考える。

墓制研究を人類学の分野から考古学の研究課題に牽引した坂詰秀一は、墓制が人間生活の重要な一面を示しており、その把握なくして文化の性格を知ることはできないと述べ、検出された埋葬事例を葬法類型にまとめて、系統的な整理を行った [坂詰1959・1961]。藤本強は墓などの精神世界の解明が縄文文化を根本から明らかにすることに寄与するもので、墓坑を中心とした個々の遺跡の遺構・遺物の属性の徹底的な抽出と相関関係の分析が、精神的側面へのアプローチの一つの方向であると述べている [藤本1983・1985]。墓制研究が縄文文化の解明に大きな意義を有していることがわかる。

分析概念である埋葬の属性については、岡村道雄 [岡村1993] や山田康弘によって示されている。山田によると、生前付加属性と死後付加属性に分かれる。前者には身体に直接行い、不可逆的なもの（抜歯など）と、脱着可能なものや可逆的なもの（装身具など）があり、後者は墓の構造に付加されるもの（墓の位置・土坑墓の形態など）と、遺体そのものに付加されるもの（埋葬姿勢・頭位方向など）、葬送儀礼のなかで付加されるもの（副葬品・甕被・抱石など）がある。さらに、埋葬を実施する立場から可視属性（埋葬位置など）と不可視属性（埋葬姿勢・副葬品など）があるという。埋葬行為には多様な属性が組み込まれ、生前と死後の属性が合わさることで、社会構造に至ることができると述べている [山田1997]。

県内の墓制でこの方法で分析できる資料は極めて少ないが、土坑墓、配石墓、埋設土器、葬法は土葬のほか、火葬があり、多様な要素が存在すると考えられる。筆者はかつて関東地方を中心に、埋葬人骨や土坑墓に注目して、土坑墓形態と埋葬姿勢の時期的傾向や出土遺物の状況について論じた [加藤2001・2003・2004]。その知見を踏まえて、埋葬人骨、配石や墓と思われる土坑から出土する遺物に着目して、縄文時代の各時期の事例を歩査し、葬法のあり方、その変遷や特徴など縄文時代の墓を集成して、概観する。出土遺物を条件とするのは認定条件が複数合致することにより、墓である可能性を高めるためである。なお、埋設土器（埋甕）は非常に多くの事例と様々な属性があり [古澤1999・2008]、理化学的分析を加味する必要があるため、本稿の対象からは除外した。

2 新潟県の墓制研究

まずは本稿の目的に沿って、土坑墓と配石墓について過去の研究を整理し、現状を確認しておきたい。全国的な研究史は、坂詰秀一 [坂詰1958a・1958b]、山田康弘 [山田1999] に詳しいので、ここでは、県

内に限って扱う。また報告書に掲載のものは、その遺跡や遺構の特徴を明らかにするためのものと捉えて、各詳細を述べる際に取り上げることにする。

本県の墓制は、北村亮・野村忠司、渡邊裕之が総論しており、阿部昭典は魚沼地方を中心に述べている。

北村・野村は、県内の墓を土坑墓・配石墓・埋甕墓を中心に、各時期でまとめている。配石を伴うものが早期に認められ、前期には墓域を形成し、有孔浅鉢や玦状耳飾が土坑から出土している。室谷洞窟の屈葬人骨は深鉢形土器に覆われた特異な事例である。中期には中央広場に墓域が形成され、伏せた浅鉢が土坑から出土し、後期には葬墓制のあり方がより複雑化し、配石墓が存在する。晩期は独自の墓域が顕著になり、上越地方に多く散見される。籠峰遺跡の石棺状配石は新潟県南西部の山間地に特徴的に認められる形態で、焼人骨が検出された配石遺構もあるとしている〔北村・野村1999〕。

渡邊は、越中・越後・佐渡の北陸地方東部地域の葬墓制の変遷を担当し、早期から晩期までの事例を扱い、居住域と墓域との関係や特徴的な葬法などについて概観し、課題を提示している。墓域形成は中期中葉を画期とし、後期中葉まで建物跡の内側に展開するようになる。しかし、中期中葉の五丁歩遺跡では居住域と墓域は分離しているが、同じ時期の清水上遺跡では明確に分離しないなどの違いがあり、遺跡の性格などを検討する必要性を指摘している。その他、「下原A型配石墓」、「上越型墓上配石」などの上部配石のみの墓と北陸地方の事例との検討、石川県真脇遺跡と類似する野地遺跡の「板敷土坑墓」の意味、元屋敷遺跡の焼人骨による火葬の出自・展開の再検討など、様々な課題を示している〔木下・渡邊2010〕。

阿部は魚沼地方の墓制の様子をわかりやすく解説している。早期・前期は石鏃の副葬、赤色顔料の検出、玦状耳飾や有孔浅鉢形土器が出土した土坑が存在する。中期は、石匙やヒスイ製大珠が出土し、抱石葬、甕被葬と思われる逆位の浅鉢、土坑墓上の大型石棒片・板状礫・柱状礫の立石があるという。後期は墓域の形成が認められず、信濃川上流域に特徴的な「柳古新田型」配石墓と呼ばれる楕円形の平面に偏平な縁石をめぐり、主軸端部に柱状礫を配置し、内側に偏平礫を敷き詰める遺構があるという。甕被葬と思われる浅鉢や深鉢、半分に裁断または、大形破片の深鉢が出土する事例が少数存在し、北信地域からの北への展開を想定している。本地域の配石墓の起源を明らかにするためには、北信地域や東南北部地域との関係が重要であると指摘している。その他に、信濃川上流域では副葬品の出土が顕著ではないとの特徴が述べられている〔阿部2014〕。

土坑墓については中村大〔中村2000〕の認定条件の研究による分類が報告書等でも散見できる。木島勉は中期の土坑の性格を貯蔵穴と土坑墓で具体的に検討しようと試みた。梅沢太久夫〔梅沢1971〕や中村などを参考に、県内の土坑墓の認定条件をまとめ、本県の土坑墓研究は人骨出土が稀なことから基礎資料の集成・分析が充分でないと述べている〔木島2003〕。その他に、山田康弘は堂の貝塚の埋葬人骨と土坑墓の大きさを分析し、装身具や副葬品を伴うものの方が大きいと指摘している〔山田2001〕。阿部昭典は原遺跡で検出された完形土器が出土する5例の土坑のうち、「甕被葬」と考えられる3例を対象に、堀之内式並行期の鉢形土器を使用し、土坑は約1mの楕円形であることを述べ、土器の選択性、土坑墓規模の偏りを指摘している〔魚沼先史文化研究会1998〕。

配石墓については特徴的な遺構を検出しているため、いくつかの研究が確認できる。全国的に配石遺構を集成した塚原正典は、新潟県の事例として関沢遺跡、葎生遺跡、寺地遺跡の3例を挙げている〔塚原1987〕。本県の配石墓をまとめた國島聡は後期初頭から前葉と、後期末葉から晩期前葉の2つの画期を想定した。後者の時期の地域的特徴は、未加工の扁平な河原石を利用し、側面と内部の敷石では大きさに差があり、石棺状の組石と土坑の上に墓標として石を配置する埋葬施設があることなどを指摘している〔國

島1990]。後期前半期の配石墓については、阿部昭典が、縁石として横長の礫を立てて配置し、その内部に偏平礫を敷き、長軸の両端に柱状礫や偏平礫を縦長な状態で埋設する例を「下原A型」と呼んでいる[魚沼先史文化研究会1998]。この配石墓形態は道尻手A類であり[阿部2005]、後に柳古新田型と改称され[阿部2009]、魚沼地方に広く分布する地域性の強い配石墓とされている。加藤雅士は、上越市籠峰遺跡の配石遺構を「上越型墓上配石」と仮称し、内壁に側石がめぐり、底面に敷石を有する北信・東信の主要な石棺墓形態の影響としつつも、形態的な違いから意味的变化を伴いながら受容したのではないかと指摘している[加藤2006・2007]。また津南町正面ヶ原A遺跡の墓を分析し、北信的な下部配石墓があるものの、「上越型墓上配石」の存在や墓の数量が多く、堅穴住居跡群と墓群がまとまって検出されていることから、新潟の特徴を有していると評価している[加藤2010]。

土坑墓や配石墓など県内の墓制研究は蓄積されつつあり、その特徴も明らかになってきている。より具体的に検討するためには、基礎資料の集成は欠くことができないと思われる。

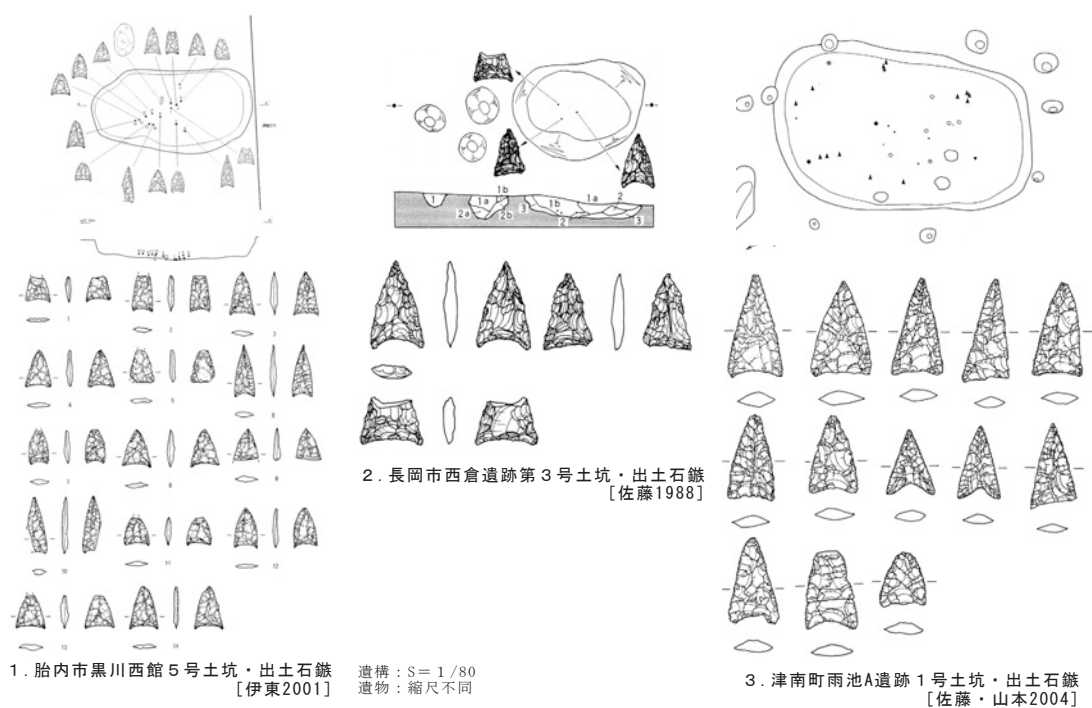
3 集成の視点

墓の認定条件は梅沢や中村により提示されているが、地域や時期によって違いがあり、単純に援用できない。そのことを踏まえて、木島は県内の中期前葉から中葉を中心とした認定条件を①人骨の出土、②人為的堆積、③底面・覆土下部に完形に近い土器や石器類の出土、④底面・覆土下部に装身具や第二の道具類の出土、⑤覆土上部・壁面に礫を配置、⑥赤色顔料、⑦平面は楕円形を呈する傾向が強い、⑧平坦な底面、⑨遺跡内での斉一性としている[木島2003]。本稿では上記①・②・③・④・⑥を参考に、遺構の堆積状況や出土遺物の相対的な評価、調査者の所見を尊重して、墓もしくは墓の可能性が高いと考えられる遺構を対象とした。墓として判断し易く、異論が少ない遺構が主体となっているため、遺物が多く出土している印象を与えるが、出土遺物がない事例が通時的に主流であることは言うまでもない。

集成結果を第1表に示す。表項目は遺跡名、所在市町村名、遺構番号等、時期、平面形態、大きさ(cm)、深さ(cm)、配石の有無、出土遺物、出土状態・縦位置、その他、文献名となっている。時期は報告書の記載を参考に、記載のないものは遺構や遺跡、出土土器の時期を充てている。なるべく、詳細な時期を記載するように心がけた。大きさ・深さは報告書に準じ、検出面での数値である。埋葬姿勢との関係を読み取るには底面での大きさが必要との指摘もあるが、掲載していない。出土遺物は2点以上出土した場合にのみ点数を記し、出土状態は報告書の記載に準じ、ない場合は断面図等から読み取った。特定の遺物に限定した出土状況の場合は、()でその種類を示している。なお、詳細な情報収集を目指すため、報告書刊行済みの遺跡を対象としている。項目に記した情報の誤記・誤認は筆者の責任である。

4 各時期の事例

集成の結果、胎内市黒川西館、長岡市西倉遺跡、津南町雨池A遺跡、阿賀町室谷洞窟、村上市谷地遺跡、上越市黒田古墳群、南魚沼市吉峰遺跡、上越市古町B遺跡、阿賀町大坂上道遺跡、津南町道下遺跡、佐渡市堂の貝塚、長岡市馬高遺跡、佐渡市藤塚貝塚、南魚沼市五丁歩遺跡、魚沼市清水上遺跡、魚沼市布場上ノ原遺跡、長岡市岩野原遺跡、上越市和泉A遺跡、柏崎市大沢遺跡、南魚沼市原遺跡、阿賀町屋敷島遺跡、津南町堂平遺跡、南魚沼市万條寺林遺跡、魚沼市町上遺跡、胎内市分谷地A遺跡、小千谷市城之腰遺跡、村上市下ゾリ遺跡、柏崎市田塚山遺跡群B地区、津南町道尻手遺跡、南魚沼市柳古下原A遺跡、十日町市野首遺跡、上越市炭山遺跡、村上市元屋敷遺跡、胎内市道下遺跡、胎内市野地遺跡、上越市籠峰遺跡、糸



魚川市寺地遺跡、田上町川船河遺跡、新潟市大沢谷地遺跡、新潟市大沢谷内北遺跡、田上町保明浦遺跡、新潟市鳥屋遺跡の42遺跡で確認した（第1図）。時期は縄文時代早期から晩期までの事例が認められる。

まずは時期ごとに事例を整理する。各遺跡の文献は一覧表に記載していることから割愛し、細かな説明や補助的に扱った事例を記した場合のみ文末に示す。

（1）早期

黒川西館5号土坑は石鏃14点・磨石、西倉遺跡第3号土坑は石鏃3点、雨池A遺跡1号土坑は石鏃13点・石匙が出土している（第2図1・2・3）。複数の石鏃を副葬するのが特徴で、石匙もある。雨池A遺跡では底面に赤色顔料と思われる赤褐色土が検出され、赤色顔料を散布する行為が存在していたと思われる。本事例は土坑が長径273cm、短径160cmと通時的な土坑の大きさと比較しても大きい。これについては後章で述べる。土器が出土することが少ないため、時期は石鏃形態や遺構周辺の時期傾向から想定されており、西倉遺跡が早期中葉、雨池A遺跡が早期末葉とされている。この時期の湯沢町上林塚遺跡には配石を伴う土坑が検出されている。しかし、埋葬施設として捉えられるかは慎重な検討が必要との指摘がなされている〔阿部2014〕。

（2）前期

この時期から認められる葬法として、土器を使用したものがある。室谷洞窟第2号人骨の右肩付近に花積下層式の深鉢が横倒しで出土している。左を下にして側臥屈位の姿勢をとらせ、右肩部に口縁部を下にした土器を被せたとされている（第3図1）〔小片1962〕。吉峰遺跡B3区5号土坑の諸磯b式期の有孔浅鉢は土坑底面の南東隅に正位の状態で出土している（第3図2）。この他、土坑から土器が正位で出土する事例として、村上市高山東遺跡SK20出土の太木2a式の鉢形土器がある。墓とするには出土位置に違和感があり、他地域との検討が必要なため、判断は保留した〔青木・石川ほか2009〕。

装身具が出土する事例もみられる。吉峰遺跡B3区10号土坑Aでは、蛇紋岩製玦状耳飾2点が1対の状態で出土し、装身具を着装して埋葬され、原位置を保って出土した例として典型である（第3図2）。古町B遺跡186号土坑では玦状耳飾が1点出土している。黒田古墳群97SK20では滑石製の管玉が出土している（第3図4）。

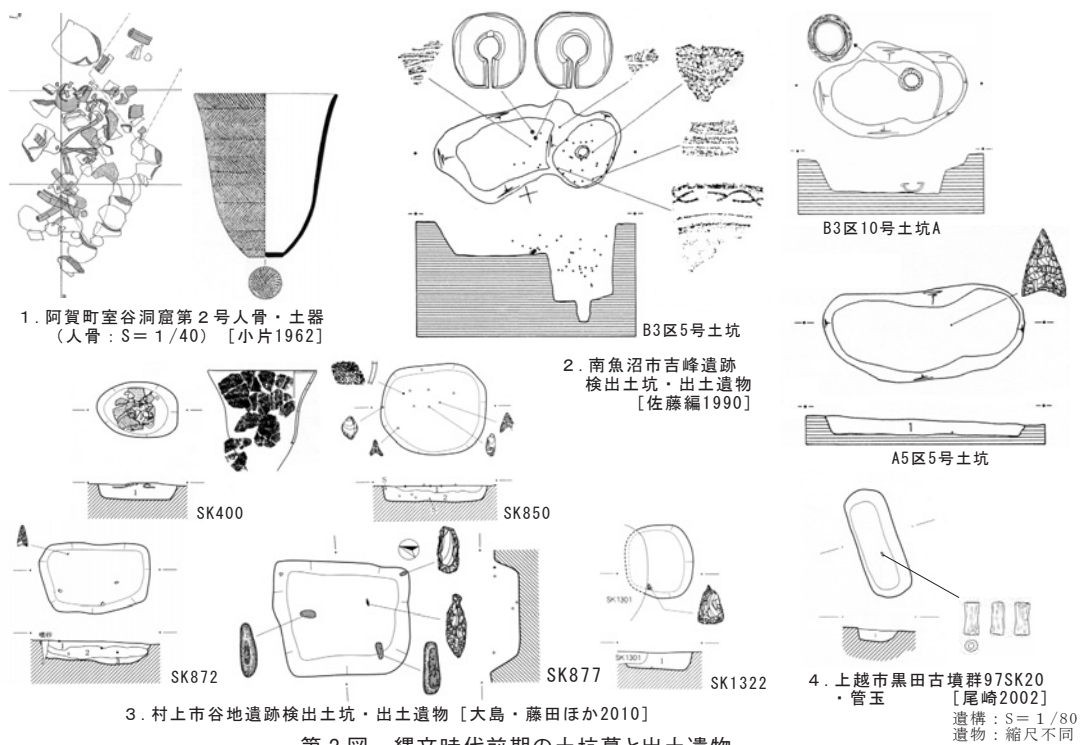
早期に特徴的であった石鏃の副葬は、出土点数は少ないが吉峰遺跡A5区5号土坑（第3図2）や谷地遺跡SK850・SK872にあり、石匙が同遺跡SK877、篋状石器がSK1322で出土している（第3図3）。

（3）中期

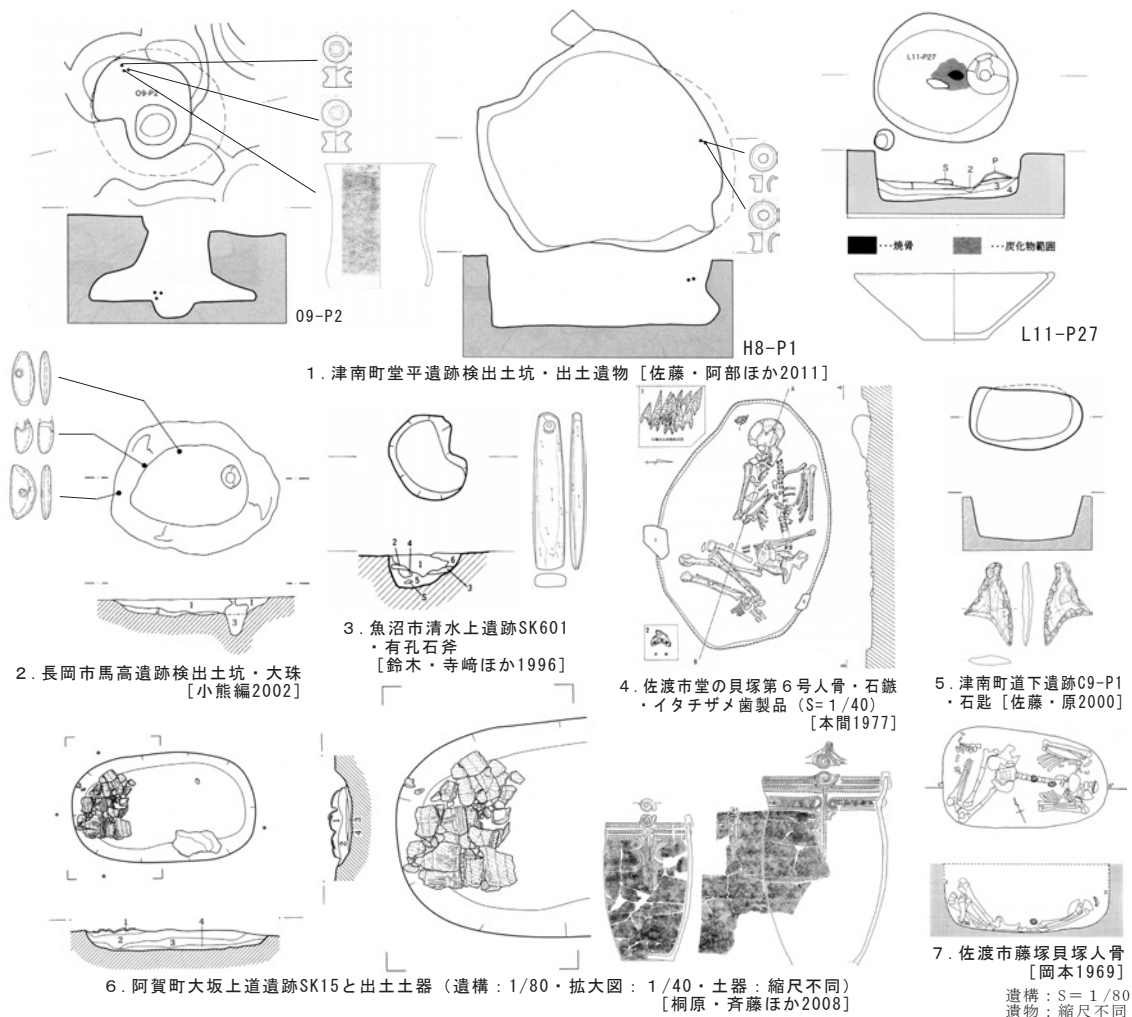
中期以降は土坑出土の遺物が増え、埋葬事例として明確に判断できる遺構が多くなる。

土坑墓の平面形は円形と楕円形類が存在し、断面形は箱形や台形以外にも袋状を呈するものもある。主に貯蔵穴が主要な用途と考えられるフラスコ（袋）状土坑からも土製耳飾が出土し、転用したと考えられる。

岩野原遺跡5E-G63や堂平遺跡H8-P1・O9-P1・I7-P19（第4図1）、大沢遺跡SK233、分谷地A遺跡35号土坑で土製耳飾が出土している。それ以外の装身具として硬玉製大珠が馬高遺跡VD-P1（第4図2）、有孔石斧が清水上遺跡SK601（第4図3）で出土している。土製耳飾の出土縦位置は土坑底面がある一方で、堂平遺跡H8-P1ではフラスコ状土坑の覆土中位に2点出土している（第4図1）。図面から



第3図 縄文時代前期の土坑墓と出土遺物



第4図 縄文時代中期の土坑墓と出土遺物 (1)

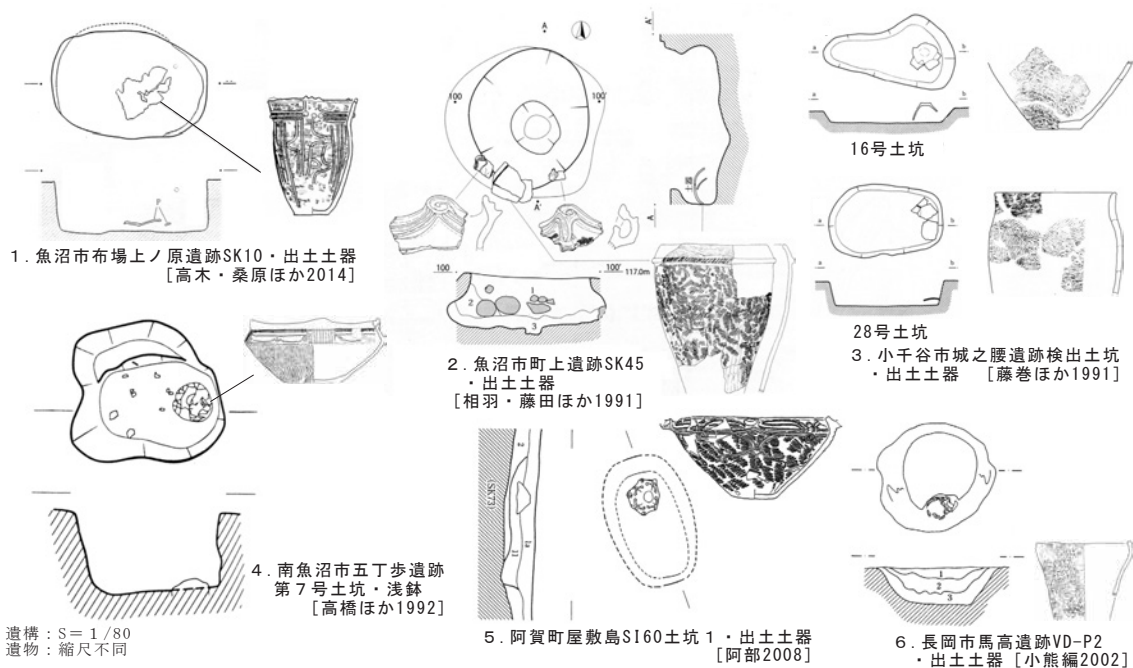
算出すると、底面から48cm上に原位置を保ったような状態である。覆土の堆積状況はわからないが、土坑が埋まる途中で埋葬された可能性も考えられる。フラスコ状土坑の墓坑転用は貯蔵穴としての用途を終了した後に、あまり時間を置かずに転用した場合と、ある程度土坑内に土壌が堆積した後に使用する場合があると考えられる。前者の場合は覆土底面もしくは下層に、後者の場合は覆土中層から上位に埋葬されたと想定できる。出土人骨が多い千葉県内でも2者の覆土位置で埋葬人骨が検出されている。

堂の貝塚第6号人骨は仰臥屈葬の壮年～熟年期の男性で、頭部付近右側の床面直上に13本の石鏃、胸部上にイタチザメ歯製品が出土している（第4図4）。多数の石鏃は早期以外には確認できない。和泉A遺跡SK917の覆土中層で石鏃が出土しているが、基部のみ残存し、副葬品としての意味を持つのか不明である。津南町道下遺跡C9-P1のほぼ底面から石匙が1点出土している（第4図5）。石鏃と同様に石匙も副葬品として扱われていることがわかる。

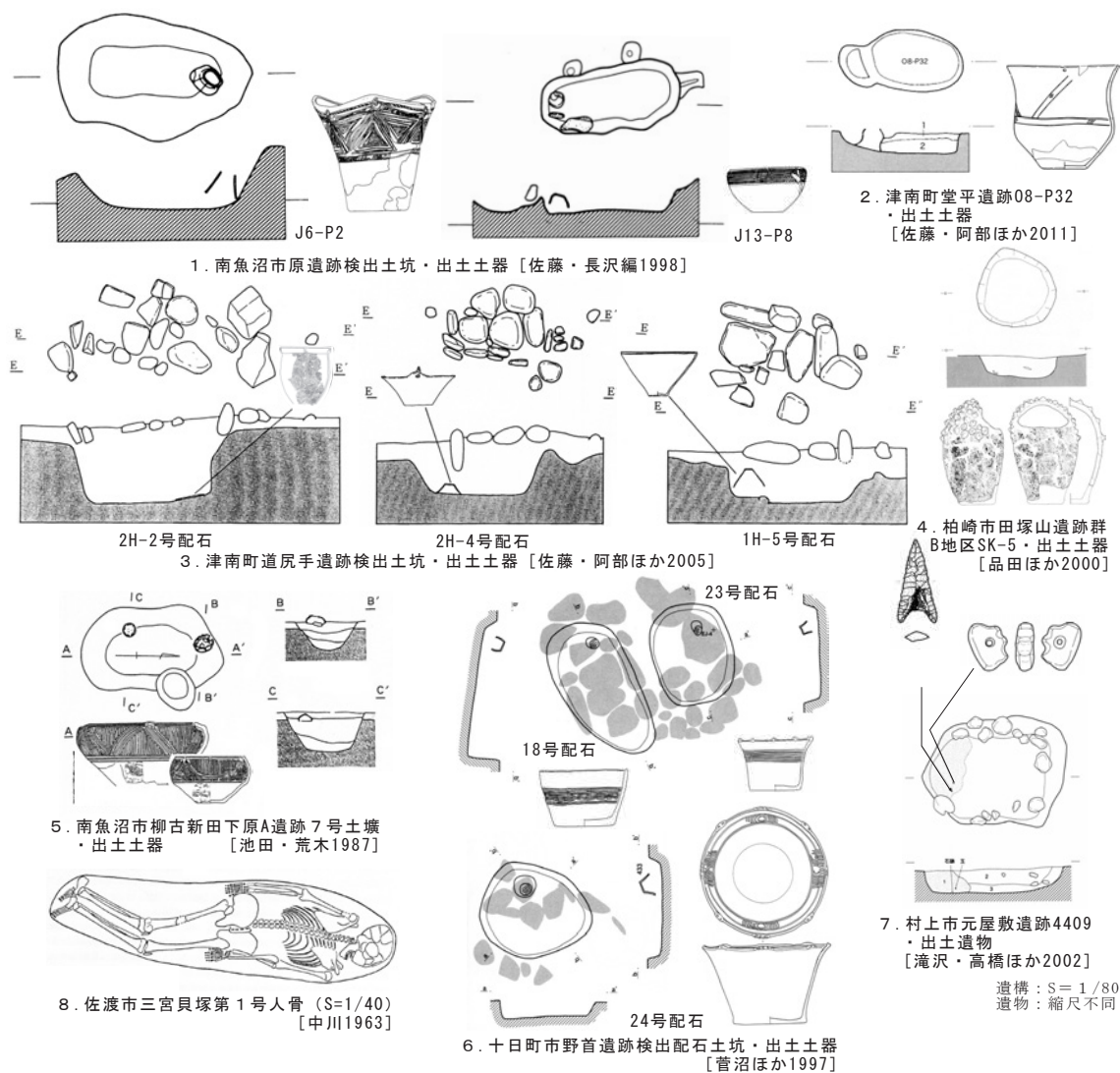
本時期は甕被葬の事例が増加する。中期初頭の例として、大坂上道遺跡SK15の深鉢形土器がある（第4図6）。覆土表面を覆うように、別個体の大形破片が互違いに並べられていた。深鉢形土器を故意に割って、意図的に交互に配置したと思われる。大形土器破片の事例は中期前葉の布場上ノ原遺跡（第5図1）、中期後葉の町上遺跡SK45（第5図2）、中期末葉の城之腰遺跡28号土坑（第5図3）などもある。このような可能性のある例として万條寺林遺跡170号土坑がある。土坑の平面形は隅丸長方形で、断面は袋状を呈し、大木8b式期の深鉢形土器口縁部大形破片が土坑覆土下層から出土している。詳細な記述はないが、図面では口縁部内面を上にした状態と思われる。

深鉢形土器の大形破片を使用する一方で、浅鉢形土器を使用する事例がある。五丁歩遺跡第7号土坑は上面を攪乱により壊されているものの、底面は長径160cm、短径110cmの楕円形で、底面直上に逆位の状態で北陸系の浅鉢形土器が出土している（第5図4）。覆土下層には地山の土壌が含まれており、掘り上げた土を埋め戻した行為が想定されている〔高橋ほか1992〕。屋敷島遺跡では土坑が住居跡の堆積土を穿って構築されていた。土層の断面観察から土坑の西側に逆位に置かれた完形の浅鉢形土器が出土した（第5図5）。その他、大木10式の浅鉢形土器が出土した下ゾリ遺跡SK37がある。逆位の深鉢形土器は、馬高遺跡VD-P2（第5図6）や底部の城之腰遺跡16号土坑（第5図3）がある。

非常に珍しい事例として堂平遺跡L11-P27がある（第4図1）。覆土中位から無文の浅鉢が逆位で出土した。浅鉢に接するように焼骨・焼土・炭化物が集中する範囲に検出されている〔佐藤・阿部ほか2011〕。焼骨の分析の結果、特徴的な部位が検出されないことからヒトとは断定されず、哺乳類とされた〔パリノ・サーヴェイ2011〕。本事例の類例は県外も含めて管見の限り思いあたらない。特殊な葬法には選択理由があると仮定して、3つの可能性が考えられる。1つ目は、焼人骨と甕被葬の被葬者が単独の場合である。なんらかの理由で火葬にされ、埋葬の際は甕被葬にした。2つ目は、焼人骨と甕被葬の複葬で、2人が同一の土坑内に埋葬された場合である。その場合、両者の強い繋がりが想定できる。3つ目は、焼骨をお供え物と想定し、土坑に埋葬した後に頭部に浅鉢を被せ、胸部に焼かれた食べ物を供え、被葬者が土に帰り、その空間に焼骨が落ち込んだと考える場合である。炭化物範囲は広がっていないことから、有機質の容器に入れられていたとも想像できる。本例を分析した阿部昭典は焼人骨であった場合、土坑内火葬ではなく、本土坑以外で火葬され、埋葬されたと考えられ、県内でも古い段階の事例であると指摘している〔阿部2011〕。出土した焼骨がヒトかどうかの再分析と、類例を含めた再検討が必要である。



第5図 縄文時代中期の土坑墓と出土遺物（2）



第6図 縄文時代後期の土坑墓と出土遺物

（４）後期

中期に顕著に認められた完形・略完形・大形被片の土器を使用した甕被葬の事例は後期中葉まで確認できる。原遺跡J13-P8では堀之内1式並行の鉢形土器、I6-P2では堀之内2式並行の鉢形土器、I11-P18では加曾利B1式並行の浅鉢形土器が逆位で出土している（第6図1）[佐藤・長沢編1998]。これらの遺構は埋葬位置・頭位、上部配石の有無などの分析がなされ、堀之内式並行の鉢形土器と墓坑の規模に関係性が認められ、土器に何らかの選択性があると指摘されている[魚沼先史文化研究会1998]。

南三十稲場式期の同様な事例は、堂平遺跡O8-P32の深鉢形土器（第6図2）、道尻手2H-4号配石の浅鉢形土器（第6図3）があり、柳古新田下原A遺跡7号土壇の浅鉢形土器2点が底面から約28cm上面で出土している（第6図5）。加曾利B1式並行期の事例は道尻手遺跡1H-5号配石の浅鉢形土器（第6図3）、野首遺跡18号配石、23号配石、24号配石の鉢形土器（第6図6）がある。

大形破片の例として、道尻手遺跡2H-2号配石の三十稲場式の深鉢形土器（第6図3）、同遺跡2H-3号配石の南三十稲場式の深鉢形土器がある。半分の無文深鉢形土器が伏せた状態で出土した万條寺林遺跡の埋甕とされている遺構も、本事例に含まれると思われる。

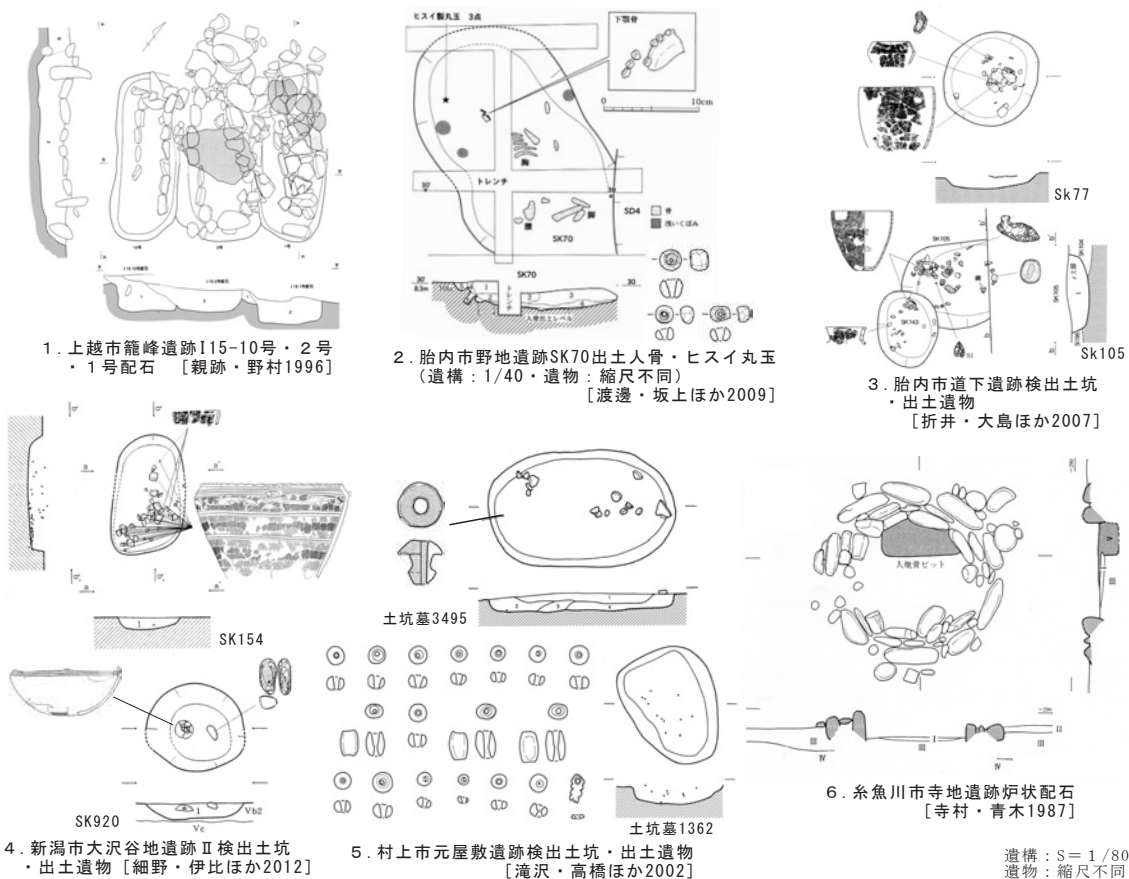
田塚山遺跡群B地区SK-5から三十稲場式期の特殊な器形の土器が出土している（第6図4）。通常の口縁部を球状に覆って閉じ、一方のみ窓状に開口し、土器上部には凸瘤が張り付けられ、下部は撚糸文が施されている。円形の土坑の片側に、開口部を上にして、斜めの状態で出土している。土器は詳細に観察され、報告がなされている。炭化物の付着は口縁付近に向かって量が多くなり、底部にむかって二次焼成の痕跡が強くなることから、正位の状態で使用されたとされている[中野1994]。異形土器でも非常に珍しい器形であり、副葬品として埋納された可能性が高い。

元屋敷遺跡4409配石墓のほぼ底面から石鏃が、やや上からは玉が出土している（第6図7）。元屋敷遺跡では後期後葉から晩期前葉を主体とする配石墓、晩期中葉を主体とする土坑墓が検出されており、玉は配石墓13基、土坑墓1基から出土し、時期的傾向が認められている。7257配石墓の玉は玉擦れが顕著で、組み合わせが想定されている。玉の組み合わせと墓の形態・分布状況との相関性は認められないという。玉の石材はヒスイ、石英片岩、滑石、緑泥片岩等がある[滝沢・高橋ほか2002]。供伴する遺物がないため本稿の分析対象ではないが、本遺跡7250配石墓・8048配石墓から焼人骨が検出されており、渡邊裕之は焼人骨葬の分布や系譜を考えるうえで重要であると指摘している[木下・渡邊2010]。

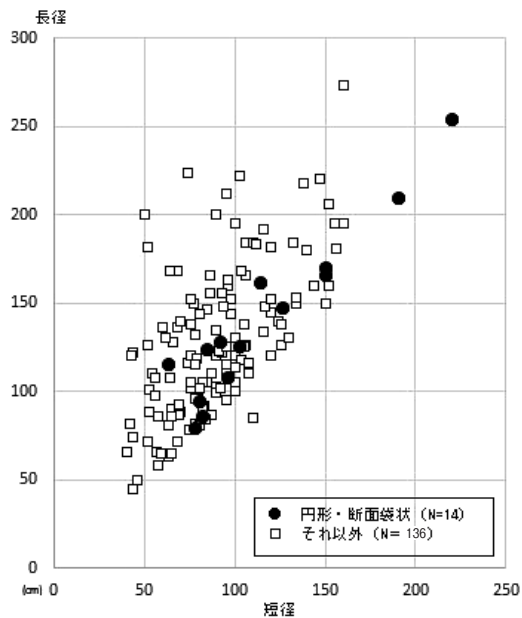
さらに、この時期の特徴としては配石墓の展開がある。本集成の対象となった事例として原遺跡・道尻手遺跡・野首遺跡・元屋敷遺跡がある。多くの配石墓が検出されている魚沼地域を分析した阿部昭典は1m前後の楕円形を基本とし、円礫を主体として構築され、縁石を部分的に巡らせ、その内側に扁平礫を敷設する道尻手A類が地域性の強い配石墓であると述べ、隣接地域と検討する余地があるものの、本地域は東北地方の配石墓に近い形態であると指摘している[阿部2005]。道尻手A類は、柳古新田型と改称されている。本県の配石墓の出現と展開を考える、重要な問題提起で、広域を対象に検討する必要がある。

（５）晩期

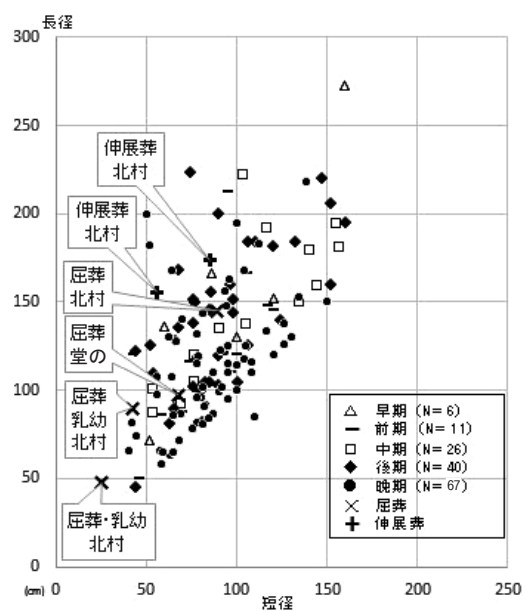
晩期になると上越地域に石棺状配石が集中する。上部に縁石を巡らせ、内側に礫を敷設し、下部に土坑がある形態で「上越型墓上配石」と仮称され、北信・東信の主要な石棺墓形態を受けつつも在地的な変化を遂げていると指摘されている[加藤2006・2007]。籠峰遺跡の事例が有名でI15-1号から耳飾が出土している（第7図1）。同様な配石遺構は顕聖寺遺跡[中川1959]や葎生遺跡[中川1967]にもある。正面ヶ



第7図 縄文時代晩期の埋葬関連遺構と出土遺物



第8図 土坑墓長短径図



第9図 各時期の土坑墓長短径図

原A遺跡でも配石墓が検出されている。野地遺跡SK1507・SK1821の底面には板材が検出されており、SK1798の永久歯列が未完成の人骨下から板材の可能性がある木材の小片が出土した [渡邊・坂上ほか2009]。同遺跡SK70は大人の人骨とともに右側側頭部付近にヒスイ製丸玉3点が出土している (第7図

2)。

晩期は土坑から遺物が出土する事例が多い。墓ではなく、祭祀的な遺構が含まれているとの考えもあることから [関1980]、中村大の土坑墓の認定条件を加味している胎内市道下遺跡、新潟市大沢谷内遺跡を中心に把握する。胎内市道下遺跡は大洞B 2 式からBC式まで営まれた集落である。遺物の出土状況はⅠ類～Ⅶ類に分類され、認定条件と対比し検討を行っている。その結果、玉類などの装身具（第7図3）完形やそれに近い土器が底面から覆土下部に出土、上面に礫を置く、あるいは立てる、土坑中央部の覆土下位に土器片が面的に広がる（第7図3）などがあるという。平面形は円形・楕円形が主流で、長径80～130cmが多い [折井・大島ほか2007]。大沢谷内遺跡は大洞C 1 式からC 2 式前半の土器が主体で、土坑からは完形やそれに近い土器が底面から覆土下部に出土する例（第7図4）や、赤色顔料のブロックを覆土に含む例がある [細野・伊比・立木ほか2012]。本遺跡のSK835からアスファルトが出土しており、晩期中葉から末葉と思われる元屋敷遺跡土坑墓3050からもアスファルト塊が出土している。この他、元屋敷遺跡の土坑墓3495は耳飾、土坑墓1362は石製の玉類が出土している（第7図5）。

寺地遺跡では外径約2m、内径1.1mの炉状配石の内部ピットから焼けた複数の人骨と獣骨が検出され、ピット上部には石鏃、底面には朱塗土器、炉内から土器片や砥石片、磨製石斧、被熱した硬玉原石が出土した（第7図6）。人骨は最小個体数11体、そのうち未成人骨1体、女性骨1体、抜歯人骨1体が含まれている [森沢・松田・小片1987]。焼人骨には土坑内火葬と火葬後埋葬があり、本事例は後者に属し [石川1988]、複数個体の集骨を焼いて合葬の形式で再埋葬されたものと想定されている [関1987]。

5 埋葬属性の傾向と分析

前章で本県において確認できた事例について、時期ごとにまとめた。本章では第1章で述べた山田康弘の埋葬属性に注目して、整理する。

（1）生前付加属性

本属性の資料として抜歯人骨、装身具がある。

抜歯人骨は寺地遺跡の焼人骨以外に、晩期の野地遺跡SK70出土人骨、後期後半の佐渡市三宮貝塚第1号人骨で見つかっている [中川1963]。装身具は事例が多く、縄文時代前期後葉の諸磯b式期の吉峰遺跡で着装時の原位置を保った玦状耳飾2点が出土している。加藤学は魚沼市清水上遺跡の田戸上層式土器を包含する層から玦状耳飾と管玉が原位置を保った状態で出土し、墓坑があった可能性を指摘している [加藤2010]。全国的にも古い段階の事例であり、玦状耳飾の出現と扱われ方を知るうえで重要である。土製耳飾は中期前葉の大沢遺跡、中葉の岩野原遺跡、堂平遺跡、後葉の分谷地A遺跡、後期後半の炭山遺跡、晩期中葉から末葉の元屋敷遺跡、晩期前半の籠峰遺跡で事例を確認できる。その他の装身具は、前期中葉から後葉と思われる黒田古墳群の滑石製管玉、中期前葉から中葉の清水上遺跡の有孔石斧、中期の馬高遺跡の硬玉製大珠、中期後葉の岩野原遺跡の硬玉製大珠、中期中葉から後期前葉の堂平遺跡の石製垂飾品、後期後葉から晩期前葉の元屋敷遺跡の玉類、晩期前葉の野地遺跡のヒスイ製丸玉、晩期の和泉A遺跡の安山岩製垂飾品がある。

耳飾は前期から晩期まで装着して埋葬され、特定の土坑墓形態に限定された様子は認められない。他の装身具も同様の傾向である。着装状態の装身具を分析した山田康弘によれば、耳飾は青年期以降で、玦状耳飾は女性、中期以降は男性の着装例も見られるという [山田2004]。富山県小竹貝塚でも玦状耳飾は女

性が着装している [町田2015]。前期の玦状耳飾の事例は女性の埋葬で、中期の土製耳飾の事例には男性の埋葬事例も含まれていると考えられる。晩期は、多くの土坑墓が検出されている一方で、元屋敷遺跡を除き、玉類の出土が認められない。野地遺跡の丸玉の重要性を物語っているように感じるとともに、土坑の覆土を篩う必要がある。

（２）死後付加属性

本属性の含まれる資料として墓の構造、埋葬姿勢、副葬品、赤色顔料がある。土器を被覆する甕被葬については次項で述べる。墓の構造は土坑墓や配石を伴う土坑、板敷土坑の事例がある。

土坑墓の平面形は長方形や楕円形の形態が中心で、断面形は箱形や台形がほとんどで、中期には袋状が認められる。堂平遺跡ではフラスコ状土坑の底面付近と覆土中位から耳飾が出土しており、２種類の転用方法がある。貯蔵穴の転用と思われる中期の円形土坑や袋状を呈する土坑の大きさを土坑全体と比較したが、特徴的な差は伺えなかった（第８図）。各時期の大きさの平均値は早期が長径154cm・短径96cm、前期が長径123cm・短径84cm、中期が長径147cm・短径105cm、後期が長径140cm・短径90cm、晩期が長径114cm・短径86cmである。本県の埋葬姿勢は前期の室谷洞窟、中期の堂の貝塚（第４図３）・藤塚貝塚（第４図７）、晩期の野地遺跡（第７図２）が屈葬で、後期後半の三宮貝塚で伸展葬（第６図８）[中川1963]がある。堂の貝塚の屈葬人骨埋葬土坑の平均が長径97cm、短径68cmで、隣県の長野県北村遺跡では乳幼児の屈葬で最大長径90cm・短径42cm、最小長径48cm・短径25cm、思春期後半期以上の屈葬で最大長径145cm・短径89cm、最小長径80cm・短径37cm、伸展葬は最大長径174cm・短径85cm、最小長径155cm・短径56cmである [樋口・平林ほか1993]。貯蔵穴の転用を除くなど事例を精査し、土坑墓の大きさを散布図に示した。比較として、屈葬と伸展葬の土坑墓長短径の数値を入れた（第９図）。伸展葬土坑に近い数値の遺構もあるが多くは屈葬土坑以下に属す。屈葬が主流で、伸展葬も少数ある可能性が伺える。また早期から晩期までの土坑墓には、乳幼児の埋葬事例も含まれていることが想定できる。早期の雨池A遺跡１号土坑（第２図３）は長径250cm以上を超え、全時期のなかでも突出して大きい（第９図）。本土坑は多数の石鏃を埋納し、赤色顔料と思われる赤褐色ブロックが検出された土坑で墓と考えられている [佐藤・山本2004]。しかし、周辺に柱穴を有することや極端に大きいことから、ほかの用途等を考える余地もある。

土坑の上部に配石を持つ事例が、後期以降に展開し、地域特有の配石も認められる。炭山遺跡１号配石は土坑内部に上層・中層上部・中層下部・下層と重層的に配石されている後期中葉から後葉の事例で、底面直上層から土製耳飾が出土している [土橋2005]。複数回にわたり、配石行為を行っている事例として興味深い。晩期には先述した野地遺跡の板敷土坑の事例も検出されている。

赤色顔料は先述した早期の雨池A遺跡１号土坑の他に、中期末の清水上遺跡E区SK239C土坑の底面西端にベンガラが検出され [鈴木・寺崎ほか1996]、後期から晩期の元屋敷遺跡にもある。

副葬品は土器、石鏃、石匙、凹石、石斧、磨石類、石皿などがある。藤塚貝塚では人骨直上に円礫が出土している。用途不明の川原石や礫もなんらかの副葬品としての意味を有しているかもしれない。なかでも通時的な副葬品としては石鏃がある。１点から複数点があり、早期は複数点の出土が特徴的である。この時期に石鏃を副葬することが墓制として確立したと考えられる。しかし、複数の副葬は後の時期には続いておらず、少量の出土が多い。13点の石鏃が出土した堂の貝塚第６号人骨は中期で、時期的にも極めて異例と言える。同じく早期から認められる副葬品として石匙がある。石匙の埋納事例を検討した坪田弘子

によれば、前期の前葉には遡らず、地域や時期によって様相を違えながら勝坂式期まで続くという〔坪田2010〕。今回の集成では谷地遺跡（第3図3）と津南町道下遺跡（第4図5）の事例が確認できた。石鏃とともに土坑墓出土の石匙にも注意する必要がある。

（2）甕被葬の展開

小金井良精は甕被葬を極めて特殊な葬法で、縄文土器や土器破片で頭部を覆うと説明している〔小金井1922〕。坂詰秀一は特殊葬法として、甕被葬は完形やそれに近い土器を遺体の頭部に被せているものと、破片を遺体の一部に覆っているものと定義している〔坂詰1961〕。この葬法に使用される土器は完形と破片、被覆される部位は頭部とそれ以外の部分であることが含まれている。室谷洞窟は前期初頭の事例で、この葬法の初期段階に位置づけられる。本事例は人類学雑誌に掲載後、報告書でその意味を再検討し、死体の最も大切な部分を覆った可能性があること、抱石葬と同様に土器を載せたなどや、不幸な死を遂げた場合などが考えられるとしている〔小片1964〕。初期の甕被葬が頭部ではないことは本葬法が頭蓋崇拝を示していないことがわかる。頭蓋崇拝でない事は山田も述べている〔山田2001〕。

その後の前期は、吉峰遺跡で正位の状態出土した事例（第3図2）はあるが、完形土器を頭部に被せたような逆位の状態出土した事例はなかった。前期の儀礼用土器の顕在化を分析した中村耕作は、墓坑に埋納された土器は花積下層式期や関山式期は少数であるものの、前期中葉から後葉にかけて増加し、諸磯c式期以降は減少する傾向にあり、諸磯a式期・b式期には浅鉢類が卓越するという〔中村2012〕。本県はこの傾向に同調していない。諸磯式との文化的な影響関係、土坑墓を穿つ掘削深度などの形態差が考えられる。土坑内に土器破片が出土する事例が散見されることから、前期までは主に破片で覆っていたと考えられる。

中期初頭になると大坂上道遺跡の別個体の土器破片を組み合わせた事例があり、五丁歩遺跡で大木7b式並行期の事例（第5図4）以降、後期中葉まで浅鉢形土器の利用が目立つ。県内の中期浅鉢の変遷を論じた阿部は、大木8a式並行期に県内に普及した可能性が高いと指摘している〔阿部2014〕。浅鉢が県内に波及するとともに、甕被葬にも使用されていると考えられる。埋葬人骨が多く出土する東京湾岸沿岸地域では深鉢形土器を使用する甕被葬が中心で、管見の限り、中期浅鉢の事例を知らない。隣県の事例を集成していないため断定できないが、この時期から本県の甕被葬の土器器種に浅鉢を選ぶ地域的な嗜好性が示されている可能性がある。その後、魚沼地方では後期中葉まで逆位の浅鉢形・鉢形土器の事例が確認できる。後期の墓坑から出土する土器器種の地域的な違いはすでに指摘されている〔加藤2003、中村2006〕。本県で加曽利B2式並行期以降、事例が認められないことは、関東地方と同じ状況である〔中村2008〕。

中期前半期の浅鉢形土器を時期や系統に整理した佐藤雅一は、在地系と非在地系の存在から出自の異なる婚姻を反映したものと推察し、婚姻儀礼のなかの共食用の器と想定している〔佐藤2001〕。後期の浅鉢形土器を器種と行為の視点から論じた鈴木徳雄は、墓坑出土の逆位の浅鉢形土器は転用ではあるが、共用という社会的単位の機能を、製作目的の使用形態とは異なる象徴性を付加し、使用しているだろうと述べている〔鈴木2000〕。甕被葬に使用される浅鉢には被熱の痕跡を残すものがあり、転用である。しかし、指摘されているように浅鉢の器種的な特異性が甕被葬に使用する要因の一つであったかもしれない。

本県の甕被葬は前期初頭から中期初頭まで土器の大形破片を使用し、中期中葉から後期中葉まで浅鉢形土器を特徴的に選択するとともに、大形土器破片も利用し、行っている。後期後葉以降の様相はやや不明確であるが、晩期まで続く、長期的な葬法と考えられる。

6 今後の課題

新潟県の墓制を概観し、現状を整理する目的で集成・分析を行った。埋葬人骨の検出例が少ない本県において、早期から晩期まで多数の事例が認められ、甕被葬、配石墓や焼人骨などの課題が確認できたことは意義あることと思う。葬法の展開や系譜、墓域の形成や社会的意味など残された課題は多く、配石墓の細かな分析や埋設土器など本稿では扱えなかった。今後、各課題解決にむけて取り組む必要がある。

本稿で確認できた墓制の意味を考えるとときに、葬制の考古学的現象と民族誌を照合すると多様な解釈が成り立つことがわかるというピーター・アッコーの指摘には考えさせられるが、それらの違いに何らかの社会的背景や意味が存在することは事実のようである [ピーター1977]。なぜという問いかけに、現代の我々が現代的感觉で解答しても縄文人の思考である縄文論理空間 [小林2010] を解明するのは難しい。とはいえ、超えられない壁を意識しつつも、現状を確認し、現在における最適解を様々な視点から導き出すことが重要だと考えている。今後は別の視角からの接近も試みなければならない。

本稿をまとめるにあたり、中村大氏・阿部昭典氏・深澤太郎氏・中村耕作氏・小林美貴氏にご指導・ご協力を賜った。記して感謝する。

引用文献

- 青木 学・石川博行・北村和穂ほか 2009『大館跡Ⅱ・東興屋遺跡・高山東遺跡・窪田遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第192集、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 阿部昭典 2005「第4節 魚沼地域の配石墓の地域性」『道尻手遺跡』津南町文化財調査報告第47輯、津南町教育委員会
- 阿部昭典 2009「新潟県における縄文時代後期前葉集落と配石遺構の隆盛」『國學院大學考古学資料館紀要』第25輯、國學院大學考古学資料館
- 阿部昭典 2011「第6節 縄文時代中期中葉から後葉の葬制について」『堂平遺跡』津南町文化財調査報告書第59輯、津南町教育委員会
- 阿部昭典 2014「Ⅲ-F 縄文人の死と埋葬」『魚沼地方の先史文化』津南学叢書第23輯、津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会
- 阿部昭典 2014「縄文時代中期の東北系浅鉢の研究」『新潟史学』第72号、新潟史学会
- 石川日出志 1988「縄文・弥生時代の焼人骨」『駿台史学』74巻、駿台史学会
- 市原市文化財センター編 1999『祇園原貝塚』市原市教育委員会
- 魚沼先史文化研究会 1998「原遺跡の研究」『新潟考古』第9号、新潟県考古学会
- 梅沢太久夫 1971「縄文時代の葬制について(1)」『台地研究』19 台地研究会
- 岡村道雄 1993「埋葬にかかわる遺物の出土状態からみた縄文時代の墓葬礼」『論苑考古学』天山舎
- 小片 保 1962「越後国室谷洞窟人骨所見」『人類学雑誌』第70巻第2号、日本人類学会
- 小片 保 1964「室谷洞窟人骨に関する二、三の問題点」『長岡科学博物館考古研究室調査報告書第6冊』長岡市立科学博物館
- 加藤雅士 2007「関東・中部地方後晩期の石棺墓」『縄文時代の考古学9 死と弔い』同成社
- 加藤雅士 2006「石棺墓の展開とその意義」『考古学雑誌』第90巻第1号、日本考古学会
- 加藤雅士 2010「墓を研究する視点」『正面ヶ原A遺跡から垣間見る縄文社会』津南学叢書 第13輯、津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会
- 加藤 学 2010「新潟県における玦状耳飾」『玉文化』第7号、日本玉文化研究会
- 加藤元康 2001「千葉県における縄文時代土壙墓の研究」『立正考古』立正大学考古学研究会
- 加藤元康 2003「縄文時代墓制研究への視角」『史紋』史紋編集委員会
- 加藤元康 2004「縄文時代中後期の墓制」『縄文文化とその周辺の祭祀・儀礼資料集』國學院大學21世紀COEプログラム
- 木島 勉 2003「縄文中期の土坑の性格」『シンポジウム新潟県の縄文集落(第1分冊)』新潟県考古学会
- 北村 亮・野村忠司 1999「第3項 墓」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 木下哲夫・渡邊裕之 2010「Ⅵ 北陸地方の縄文集落の葬墓制」『シリーズ縄文集落の多様性Ⅱ葬墓制』雄山閣
- 小林達雄 2010「縄文遺跡の来し方行く末」『遺跡学研究』第7号、日本遺跡学会
- 坂詰秀一 1958a「縄文式文化葬制の研究略史(前)」『西郊文化』第17輯、杉並区史編算委員会
- 坂詰秀一 1958b「縄文式文化葬制の研究略史(前)」『西郊文化』第18輯、杉並区史編算委員会
- 坂詰秀一 1959「縄文文化葬法類型の地域的編年の展開(予察)」『古代文化』第3巻第3号、古代学協会
- 坂詰秀一 1961「日本石器時代墳墓の類型的研究」『日本考古学研究』恭和印刷株式会社

- 佐藤雅一 2001「信濃川中流域の浅鉢形土器について」『新潟考古』第12号、新潟県考古学会
- 関 雅之 1980「Ⅵ まとめ」『鳥屋遺跡Ⅰ』豊栄市教育委員会
- 関 雅之 1987「第2章 配石遺構と木柱群の考察」『史跡寺地遺跡』青海町
- 坪田弘子 2010「土壙墓に埋納された石匙」『比較考古学の新天地』同成社
- 中川成夫 1963『新潟県佐渡三宮貝塚の研究』立教大学博物館学講座研究報告2、立教大学博物館学講座
- 中川成夫 1959『顕聖寺遺跡』浦川原村文化財調査報告第1、浦川原村教育委員会
- 中川成夫 1967『律生遺跡』立教大学博物館学講座調査報告4、立教大学博物館学講座
- 中野 純 1994「5 田塚山遺跡群B地区SK-5 出土の異形土器について」『柏崎市の遺跡Ⅲ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第19集、柏崎市教育委員会
- 中村 大 2000「土器の出土状態からみた土壙墓の認定について」『國學院大學考古学資料館紀要』第16輯、國學院大學考古学資料館
- 中村耕作 2006「縄文時代後期前半期の土器被覆葬」『國學院大學史学研究集録』第31号、国学院大学日本史学専攻大学院会
- 中村耕作 2008「葬送儀礼における土器形式の選択と社会的カテゴリ」『物質文化』87号、物質文化研究会
- 中村耕作 2012「土器カテゴリ認識の形成・定着」『古代文化』第64巻第2号、古代学協会
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2011「付編4 L11-P27出土の焼骨の分析」『堂平遺跡』津南町文化財調査報告書第59輯、津南町教育委員会
- 樋口昇一・平林 彰・町田勝則 1993『北村遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14、長野県教育委員会
- 古澤安史 1999「新潟県朝日村本屋敷遺跡における甕棺について」『新潟県考古学談話会会報』第20号、新潟県考古学談話会
- 古澤安史 2008「元屋敷遺跡の埋設土器についての再検討」『三面川流域の考古学』第6号、奥三面を考える会
- 藤本 強 1983「墓制成立の背景」『縄文文化の研究』第9巻、雄山閣
- 藤本 強 1985「縄文文化の精神的側面の手がかりを求めて」『信濃』第37巻第4号、信濃史学会
- 町田賢一 2015「北陸地方における縄文墓制」『季刊考古学』第130号、雄山閣
- 森沢佐三・松田健史・小片 保 1987「第2章 寺地遺跡（配石遺構）出土の人焼骨について」『史跡寺地遺跡』青海町
- 山田康弘 1997「土井ヶ浜集団の社会構造」『先史学・考古学論究Ⅱ』龍田考古会
- 山田康弘 1999「墓制研究 墓制論」『縄文時代』第10号第3分冊、縄文時代文化研究会
- 山田康弘 2001「縄文人骨の装身具・副葬品の保有状況と土壙長」『物質文化』70、物質文化研究会
- 山田康弘 2001「縄文時代における人骨頭部の取り扱い方」『情報祭祀考古』第20号、祭祀考古学会
- 山田康弘 2004「縄文時代の装身原理」『古代』第115号、早稲田大学考古学会
- ピーター・J・アッコー（西村正雄訳）1977「埋葬の考古学」『現代思想』1月号（第5巻第1号）、青土社（原文：Peter J.Ucko 1969 Ethnography and archaeological interpretation of funerary remains. World Archaeology Volume I.No2）

※分析に使用した報告書については、一覧表の最後に掲載した。

第1表 分析対象資料一覧(1)

遺跡名	市町村名	遺構番号等	時期	平面形	長径	短径	深度	配石	出土遺物	出土状態・縦位置	その他	文献
黒川西館 西倉遺跡	胎内市 長岡市	5号土坑	早期	楕円形	166	86	23	×	石鏃14点、磨石	覆土中層～下層		伊東2001
		第3号土坑	早期中葉	楕円形	130	100	20	×	石鏃3点	先端欠損(石鏃1)、覆土下層		佐藤1988
		1号土坑	早期末葉	楕円形	273	160	22	×	石鏃13点、石匙、不定形石器、剥片2点、調整剥片5点、破片2点	底面付近(石鏃12・石匙)、上層(石鏃1・不定形石器)	赤褐色土・ブロック3カ所	
雨池A遺跡	津南町	3号土坑	早期末葉	不整楕円形	136	60	12	×	石匙	不明		佐藤・山本2004
		5号土坑	早期末葉	楕円形	152	120	35	×	剥片	不明	赤褐色土	
		6号土坑	早期末葉	楕円形	72	52	19	×	石匙	不明		
		第2号人骨	花積下層式並行期	-	-	-	-	×	深鉢大形破片	被覆状態、人骨右肩部上	女性、壮年期～熟年期、屈葬	小片1962
谷地遺跡	村上市	SK400	根小屋式期	楕円形	86	58	18	×	深鉢・円鏃	口縁斜め下・覆土上面(深鉢)、土器付近(鏃)面(石鏃1)		
		SK850	二ツ木式～四山式並行期	楕円形	110	97	18	×	石鏃2点、面極石器2点	底面付近(石鏃1、面極石器2)、覆土上面(石鏃1)		
		SK852	花積下層式期	楕円形	120	100	16	×	深鉢	覆土上面(深鉢)		
		SK872	二ツ木式～四山式並行期	楕円長方形	116	74	24	×	石鏃	覆土下層(石鏃)		大島・藤田ほか2010
		SK877	前期初頭～中葉	楕円長方形	145	120	30	×	石匙	床面直上(石匙)		
		SK1414	二ツ木式～四山式並行期	楕円長方形	148	117	21	×	深鉢	床面直上(石匙)、覆土上層(筧状、磨石類2)		
		SK1322	前期初頭～中葉	楕円長方形	78	(72)	20	×	筧状石器	覆土中位		
		97SK20	前期中葉～後葉	長方形	120	43	12	×	管玉	底面直上		
		B3区5号土坑	諸磯b式期	楕円形	166	106	37	×	有孔浅鉢形土器	底面中央直上		
		B3区10号土坑A	諸磯b式期	長方形	88	70	82	×	契状耳飾2点	正位、底面直上		
吉峰遺跡	南魚沼市	A5区5号土坑	前期	長楕円形	212	95	20	×	石鏃	床面直上		佐藤編990
古町B遺跡 大坂上遺跡 道下遺跡 堂の貝塚	上越市	186号土坑	諸磯b式期	楕円形	50	46	34	×	契状耳飾	不明		案1993
		SK15	五領ヶ台Ⅱ式期	楕円長方形	192	116	24	×	深鉢大形破片2個体、石皿	互違い重ね(深鉢)、覆土上面		桐原・斉藤ほか2008
		C9-P1	中期初頭	楕円長方形(袋状)	116	63	47	×	石匙	底面付近		佐藤・原2000
		第6号人骨	新崎式期	楕円形	135	90	7	×	石鏃13本、イタチザメ歯製品、石3点	底面直上(石鏃)、人骨上(歯製品、石)	仰臥屈葬	本間1977
		VD-P1	中期	楕円形	-	-	-	×	硬玉製大珠3点	底面付近		
		VD-P2	中期後葉	楕円形	-	-	-	×	深鉢	逆位、底面直上	底部欠損	小椋編2002
		佐渡市	中期	楕円形	88	53	50	×	小円鏃2点	胸部と腹部の直上		岡本1969
		南魚沼市	大木7b式期	楕円形	160	144	92	×	浅鉢	逆位、底面直上	北陸系浅鉢	高橋ほか1992
		SK601	中期前葉・中葉	不整楕円形	93	69	35	×	有孔石斧	覆土下層		鈴木・寺崎ほか1996
		SK161B	新崎式期	円形	126	102	18	×	打製石斧、石皿	不明	覆土中層から扁平礫出土	
布場上ノ原遺跡	魚沼市	SK10	新崎式期	楕円形(袋状)	162	114	56	×	深鉢	覆土下層		高木・桑原ほか2014
		8-G-F1	中期中葉	円形(袋状)	110	-	123	×	土器、石皿、凹石、打穿2点、土製耳飾2点	底面付近(耳飾)		
		4-E-G4	中期後葉	楕円形	180	140	25	×	硬玉製大珠	底面付近		胸形・寺崎1981
		5-E-G63	中期	不整楕円形	220	-	40	×	土製耳飾	底面付近(鏃)		
和泉A遺跡	上越市	100-L140	中期	円形	210	190	136	×	土偶、石鏃3点、土器、土製耳飾	覆土(土偶、石鏃)、土器内(土製耳飾)	土器内に土製耳飾と骨	
		SK838	中期前葉	円形	128	92	79	×	石棒	覆土上位		
		SK917	中期前葉	楕円形	138	105	60	×	石鏃、剥片2点	覆土中層		加藤・荒川1999
		SK951	中期前葉	円形	95	80	44	×	磨石類	覆土上層		
大沢遺跡 原遺跡 屋敷島遺跡	柏崎市	SK-233	新崎式期	楕円長方形	105	76	22	×	小形土器2点、土製耳飾2点	底面直上(土器2)		品田ほか2000
		H6-P4	中期後葉	円形(袋状)	166	150	56	×	深鉢	不明		
		E12-P19	中期中葉	楕円形	181	156	36	×	大形破片	底面直上	写真図版に大形破片出土	佐藤・長沢編1998
		SK601	大木8a式期	不明	150	-	20	×	浅鉢	覆土上面		阿部2008
堂平遺跡	津南町	H8-P1	大木8a式並行期	円形(袋状)	254	220	64	×	耳飾2点	覆土中位	貯蔵穴を墓に転用	佐藤・阿部ほか2011
		大木8b式並行期	大木8b式並行期	円形(袋状)	108	96	88	×	大形土器破片、土製耳飾2点	土器内上部から耳飾出土、覆土下層	貯蔵穴を墓に転用	

第1表 分析対象資料一覧(2)

遺跡名	市町村名	遺構番号等	時期	平面形	長径	短径	深度	配石	出土遺物	出土状態・縦位置	その他	文献
堂平遺跡	津南町	17-P19 (J7P1)	橋倉一沖ノ原I式期	楕円形(袋状)	196	-	28	×	土製耳飾	底面付近		
		L9-P28	中期中葉～後期前葉	長楕円形	156	86	42	×	石製垂飾品	覆土下層		佐藤・阿部ほか2011
		L11-P1	大木8a式並行期	円形	80	78	18	×	浅鉢	逆位、底面付近	小形の墓穴	
		L11-P27	大木8a式並行期	楕円形	150	134	52	×	浅鉢	逆位、底面付近	焼骨・炭化物出土	
万條寺林遺跡	南魚沼市	170号土壙	大木8a式期	陣丸長方形(袋状)	124	84	58	×	深鉢大形破片	覆土下層		池田・荒木1988
町上遺跡	魚沼市	SK45	中期後葉	楕円形(袋状)	148	126	67	×	深鉢大形破片、深鉢破片	覆土中位	中央に窪み、中位～上位に隣	相羽・藤田ほか2013
分合地A遺跡	胎内市	27号土坑	中期後葉	不整楕円形	222	103	20	×	石皿2点、磨石2点、剥片	覆土中層		伊東2003
		35号土坑	中期後葉	不整楕円形	101	53	51	×	土製耳飾、磨石	底面直上(耳飾)		
城之腰遺跡	小千谷市	16号土坑	後期初頭	楕円形	138	76	16	×	深鉢	口縁部欠損、逆位		藤巻ほか1991
		28号土坑	中期末葉	楕円形	120	76	28	×	深鉢大形破片	2分割、覆土上面		
下ノリ遺跡	村上市	SK37	大木10式期	楕円形	195	155	34	×	浅鉢	逆位、底面直上	土坑中央上面に扁平礫	和田ほか1990
		J11-P27	後期初頭	楕円形	195	160		×	深鉢	不明		
大沢遺跡	柏崎市	K13-P49	後期初頭	円形(袋状)	170	150	120	×	深鉢	不明		品田ほか2000
		I11-P10	後期初頭	楕円形	126	106	8	×	深鉢	不明		
田塚山遺跡群 B地区	柏崎市	SK-5	三十稲場式期	円形	86	82	22	×	異形土器	斜位	底部欠損。開口部分が真上に向くように斜位で埋設。内面炭化物付着、二次焼成痕跡	品田ほか1994
万條寺林遺跡	南魚沼市	135号土壙	後期前葉	楕円形	90	65	19	×	磨製石斧(刃部欠損)	不明		池田・荒木1988
		埋糞	後期前葉	楕円形	100	80	18	×	深鉢半分	伏せた状態、底面直上		
		15号土坑	南三十稲場式期	楕円形	140	124	71	×	深鉢大形破片、石匙	底面直上(深鉢)、中層(石匙)		
		23号土坑	中期末～後期前葉	不整長方形	184	106	57	×	深鉢破片、石鏃、石皿破片、剥片	覆土上層		
分合地A遺跡	胎内市	26号土坑	南三十稲場式期	楕円形	182	120	42	×	深鉢破片、ピエス・エスキュー、磨石	覆土中層		伊東2003
		29号土坑	南三十稲場式期	楕円形	119	78	24	×	磨石	覆土		
		30号土坑	中期中葉～後期前葉	楕円形	82	81	18	×	石皿、石匙	覆土中層		
		36号土坑	中期末～後期前葉	不明	45	44	28	×	石鏃、ピエス・エスキュー、剥片	覆土下層		
		1H-5号配石	加曾利B1並行期	楕円形	144	-	56	○	浅鉢	逆位、底面付近		
		1H-15号配石	加曾利B1並行期	楕円形	206	152	52	○	凹石	底面付近		
		1H-17号配石	三十稲場式～加曾利B1式並行期	楕円形	160	152	52	○	石器	不明		
道尻手遺跡	津南町	1H-18号配石	三十稲場式～加曾利B1式並行期	楕円形	184	132	80	○	石棺	覆土中層		佐藤・阿部ほか2005
		2H-2号配石	三十稲場式期	長方形	184	110	92	○	大形土器破片	底面直上		
		2H-3号配石	南三十稲場式期	楕円形	160	96	60	○	大形土器破片	壁面直上		
		2H-4号配石	南三十稲場式期	長方形	152	76	68	○	浅鉢、石鏃	逆位、底面直上(浅鉢)、石鏃(覆土)		
堂平遺跡	津南町	O8-P32	南三十稲場式期(新段階)	楕円形	128	66	22	×	深鉢	逆位、底面直上		佐藤・阿部ほか2011
原遺跡	南魚沼市	007T-P123	後期前葉	楕円形	200	90	25	×	鉢	逆位、底面ほぼ直上		
		I6-P2	後期前葉	楕円形	152	98	48	×	深鉢	逆位、底面ほぼ直上		佐藤・長沢編1998
		J13-P8	後期前葉	楕円形	103	90	64	×	鉢	逆位、覆土下層		
柳古新田下原 A遺跡	南魚沼市	51号配石土壙 7号土壙	南三十稲場式期	楕円形	146	85	40	○	深鉢破片2個体・鉢・石斧	覆土中位(土器)		池田・荒木1987
		1号配石	南三十稲場式期	楕円形	144	98	41	×	浅鉢2点、石鏃	逆位・覆土上層(浅鉢)		
		24号配石	中期後葉～後期前葉	楕円形	105	85	22	○	深鉢底部	逆位、覆土上層	内面に炭化物付着	
野首遺跡	十日町市	加曾利B1並行期	加曾利B1並行期	不整円形	105	100	18	○	鉢	逆位、底面付近		菅沼ほか1997
		23号配石	加曾利B1並行期	陣丸長方形	105	82	20	○	鉢	逆位、底面やや浮く		
		18号配石	加曾利B1並行期	楕円形	150	77	32	○	鉢	逆位、底面やや浮く		
原遺跡	南魚沼市	H11-P18	後期中葉	楕円形	110	54	8	×	浅鉢	逆位、底面付近		佐藤・長沢編1998
炭山遺跡	上越市	配石1号	後期後半	不整長方形	220	147	70	○	土製耳飾	床面直上層	土坑内部中層から上層に重層的に配石	土橋2005

第 1 表 分析対象資料一覧 (3)

遺跡名	市町村名	遺構番号等	時期	平面形	長径	短径	深度	配石	出土遺物	出土状態・縦位置	その他	文献
元屋敷遺跡	村上市	4116	後期後葉～晩期前葉	長楕円形	128	66	20	○	玉 4 点	水洗時		
		4115	後期後葉～晩期前葉	長楕円形	130	62	22	○	玉	水洗時		
		4159	後期後葉～晩期前葉	長楕円形	108	56	22	○	玉 7 点 (東側 3)	水洗時 玉 4 点		
		4409	後期前葉	長楕円形	120	90	26	○	玉 2 点 (西側 1)、石鏃	底面 (石鏃)、底面付近 (玉)、水洗時 玉 1 点		
		4160	後期後葉	長楕円形	136	68	18	○	玉 32 点 (西側 18、東側 3)、土鏃	覆土中層、水洗時 玉 11 点		
		4429	後期後葉～晩期前葉	長楕円形	108	64	10	○	玉 16 点 (北側 11)、棒状加工礫	覆土中層、水洗時 玉 5 点	赤色土	
		4096	後期後葉	長楕円形	126	52	26	○	玉	水洗時		
		4413	後期前葉～中葉	長楕円形	102	76	30	○	赤色漆塗り磁甕破片	覆土中層		
		4133	後期前葉～後葉	長楕円形	168	68	12	○	玉	水洗時		
		4083	後期後葉	長楕円形	81	63	26	○	磨製石斧調整剥片、頁岩チップ	不明		
		4055	後期後葉	長楕円形	224	74	22	○	石剣、剥片	不明		
		4503	後期中葉	長楕円形	-	64	50	○	玉 68 点 (中央 28、やや西より 40)	覆土上層		
		4157	後期中葉～晩期初頭	長楕円形	168	64	28	○	焼骨 (ニホンカモシガ、ツキノワグマ、野ウサギ、鳥類など)	覆土上層		滝沢・高橋ほか 2002
		4428	後期後葉～晩期前葉	長楕円形	182	52	14	○	玉 3 点 (縁下 2)	覆土中層、水洗時 玉 1 点		
		7257	後期後葉～晩期前葉	長楕円形	-	58	13	○	玉 18 点 (東側 12)	底面直上～中層、水洗時 玉 6 点		
		7180	後期前葉～晩期前葉	長楕円形	66	40	30	○	玉 2 点 (西側 1)	覆土中層、水洗時 玉 1 点		
和泉入遺跡	上越市	7241	後期前葉～晩期前葉	長楕円形	-	60	58	○	玉 30 点 (西側 26)	底面付近、水洗時 玉 4 点	ヒスイの割合高い	
		3495	晩期中葉～末葉	長楕円形	183	112	27	×	土製耳飾	底面直上		
		2145	晩期中葉～末葉	円形	218	138	81	×	土器	上層～中層	上層に径約 20cm の礫多数。	
		3050	晩期中葉～末葉	円形	-	100	45	×	アスファルト	底面直上		
		145	大淵 C 1 式並行期	円形	134	116	55	×	土器 3 点	上層～中層	中層に径約 20cm の扁平な円礫	
		2829	大淵 A 式後半期並行期	円形	78	75	25	×	土器	下層～底面	下層中央に扁平な円礫	
		495	大淵 A 式並行期	円形	118	104	50	×	土器 6 点	上層		
		486	大淵 C 1 式並行期	長楕円形	163	96	55	×	土器	不明	中層に径約 20cm の扁平円礫	
		1362	晩期中葉～末葉	長楕円形	122	93	21	×	玉類 18 点	底面直上～覆土上層		
		SK004	晩期	円形	114	100	40	×	石製垂飾品	覆土中層		加藤・荒川 1999
		SK005	晩期初頭	円形	110	108	76	×	深鉢破片、耳栓、剥片、川原石	覆土中層		
		SK34	晩期前葉	隅丸方形	(105)	100	6	×	小形鏃、円礫	底面直上		
		SK100	晩期前葉～中葉	円形	87	87	39	×	小形鏃、鏃、円礫	入れ子状、横位、覆土下層		
		SK238	晩期前葉～中葉	円形	58	58	20	×	深鉢、磨石類	横位、底面直上 (深鉢)		
		SK79	晩期前葉～中葉	楕円形	96	80	12	×	深鉢	上層下面に土器片を凹形に置き、内部に破片を敷き、底部編を内面を上にして置く		
道下遺跡	胎内市	SK210	晩期前葉～中葉	楕円形	87	69	24	×	深鉢	大形破片と破片を組み合わせる、底面直上		
		SK 7	大淵 BC 2 式期	楕円形	96	78	9	×	鏃、円礫	覆土上位		
		SK16	大淵 B 2 式期	長楕円形	(87)	51	20	×	深鉢、石鏃、破片 44 点、礫	破片を重ねる、覆土上面		
		SK77	晩期前葉～中葉	円形	99	90	12	×	深鉢破片、壺大形破片、玉類未製品	内面上向きに別破片を重ねる、覆土上位		
		SK105	晩期前葉～中葉	楕円形	(120)	89	22	×	深鉢大形破片、石鏃、磨石類、砕片、礫 2 点	破片を重ねる、覆土中～下位 (深鉢)		
		SK135	大淵 BC 2 式期	楕円形	(116)	(99)	32	×	鏃大形破片、礫 2 点	覆土上面～上層		
		SK144	大淵 BC 2 式期	楕円形	63	63	14	×	深鉢大形破片	面的に集積、覆土中位		
		SK180	大淵 B 2 式新～BC 1 式期	楕円形	128	(96)	18	×	深鉢破片、右付浅鉢破片	面的に置かれている、上層下位		
		SK193	晩期前葉～中葉	楕円形	-	57	12	×	深鉢大形破片	覆土上位		
		SK197	大淵 B 2 式新～BC 1 式期	円形	66	57	16	×	壺	横位、覆土上面		折井・大島ほか 2007

第 1 表 分析対象資料一覧 (4)

遺跡名	市町村名	遺構番号等	時期	平面形	長径	短径	配石	出土遺物	出土状態・縦位置	その他	文献
道下遺跡	胎内市	SK208	晩期前葉～中葉	円形	82	78	18	×	深鉢大形破片	破片を重ねる、覆土上層	折井・大島ほか2007
		SK211	大洲BC 2 式期	楕円形	81	81	20	×	深鉢破片、円礫	破片を重ねる、覆土上層	
		SK244	晩期前葉～中葉	隅丸方形	(98)	84	22	×	深鉢大形破片	面的にSK245を跨ぐ、覆土上面	
		SK245	晩期前葉～中葉	隅丸方形	58	58	14	×	深鉢大形破片	面的にSK244を跨ぐ、覆土上面	
		SK293	大洲BC 2 式期	楕円形	86	65	28	×	深鉢破片、円礫	面的に置かれる (深鉢)、覆土上面	
		SK 3	晩期前葉～中葉	円形	84	84	26	×	深鉢大形破片、礫 7 点	内面上向きの上に別破片、覆土上層	
		SK84	晩期前葉～中葉	楕円形	110	87	40	×	深鉢破片 2 副体、礫 7 点	面的に分布、覆土上層	
		SK146	晩期前葉～中葉	不明	-	-	12	×	深鉢大形破片、円礫	破片を重ねる、覆土上面	
		SK184	晩期前葉～中葉	楕円形	123	91	11	×	深鉢大形破片	破片を重ねる、覆土上位	
		SK214	晩期前葉～中葉	円形	(153)	-	10	×	深鉢大形破片	面的に破片を置く、覆土上位	
		SK229	晩期前葉～中葉	不明	-	-	11	×	深鉢破片	面的に破片、覆土上面	
		SK556	大洲B 2 新～BC 1 式期	長楕円形	144	81	12	×	深鉢、円礫	覆土上層	
		SK114	晩期前葉～中葉	円形	126	126	24	×	深鉢大形破片、円礫、礫 2 点	破片の上に別の破片を重ねる、覆土上層	
		SK85	晩期前葉～中葉	長楕円形	156	93	30	×	深鉢土器破片、剥片 2 点、円礫、礫	底面～下層上面	
		SK111	晩期前葉～中葉	楕円形	102	81	15	×	土器破片 16 点、磨石類、剥片、礫 3 点	面的に分布、覆土中位	
		SK120	晩期前葉～中葉	楕円形	(172)	119	26	×	土器片 12 点、石鏝、砕片 2 点、礫 7 点	面的に分布、覆土上層下位	
		SK248	晩期前葉～中葉	長楕円形	(150)	89	12	×	土器片 6 点、剥片、礫	覆土上層	
		SK32	晩期前葉～中葉	円形	116	108	12	×	深鉢、円礫、扁平礫、剥片、破片	覆土上面では面的、下位で傾位、覆土上位	
		SK50	晩期前葉～中葉	不明	-	-	15	×	礫 (拳大)	覆土上面	
		SK106	晩期前葉～中葉	長楕円形	168	104	26	×	土器片 15 点、砕片、扁平礫、礫 2 点	覆土上層 (扁平礫)、上層～下層 (土器)	
野地遺跡	胎内市	SK231	大洲BC 2 式期	不整形	138	126	54	×	鉢、剥片 2 点、砕片	逆位、覆土上位	鉢に煤の付着、炭化材やアワ・ヒエ出土、土坑内で火を焚いた可能性
		SK243	晩期前葉～中葉	長楕円形	148	94	40	×	鉢	傾位、底面直上	
		SK70 (人骨)	晩期前葉	楕円形	(122)	87	15	×	ヒスイ製丸玉 3 点	3 点集中、右側側頭部付近	
		I15-1 号配石	晩期前葉	隅丸長方形	200	50		○	耳飾	覆土	
		L16-28 号配石	晩期前葉	長方形	140	70	20	○	耳飾	覆土	
龍峰遺跡	上越市	L16-1 号配石土坑	大洲C 1 式期	長方形	195	100	25	○	深鉢	縦割りで口縁と底部を逆、扁平礫の上	観跡・野村1996
		J17-3 号配石	後期末葉	長方形	122	44	51	○	注口土器	底面	
		H15-Pit 1	後期後葉～晩期中葉	円形	120	120	21	×	鉢破片	覆土上面中央	
寺地遺跡	糸魚川市	炬状配石内ピット (焼人骨)	晩期前葉～中葉	長方形	82	42	25	×	石鏝、朱塗土器片、土器片、砥石片、磨石、磨石、被熱硬玉原石 (砥石)	覆土上面 (石鏝)、底面 (朱塗土器)	寺村・青木・関1987
川船河遺跡	田上町	A地区 2 号土坑	晩期中葉	楕円形	74	44	12	×	深鉢大形破片	不明	伊藤1996
		A地区 6 号土坑	晩期中葉	円形	78	75	15	×	深鉢大形破片	不明	
		B地区 3 号土坑	後期後葉	円形	92	83	33	×	深鉢大形破片	壁面付近	
大沢谷地遺跡Ⅱ	新潟市	SK89	晩期中葉	円形	72	68	7	×	壺、礫	破片状態、覆土上位	細野・伊北・立木ほか2012
		SK216	晩期前葉	円形	65	65	10	×	浅鉢、磨石	逆位・覆土上位 (浅鉢)、底面直上 (磨石)	
		SK252	晩期中葉	楕円形	66	-	22	×	深鉢	潰れた状態、覆土上層	
		SK154	晩期中葉	長楕円形	132	78	12	×	深鉢、深鉢破片、鉄細片	破片状態・覆土上位～底面直上 (深鉢)	
		SK1015	晩期中葉	隅丸方形	65	59	11	×	浅鉢	正位、覆土下位	
		SK483	晩期中葉	楕円形	119	79	12	×	壺	潰れた状態、覆土上面	
		SK935	晩期中葉	不整形	153	134	56	×	浅鉢、石皿、台石片 9 点	破片状態・覆土中層 (浅鉢)、分割 (石皿)、覆土下層 (台石)	
		SK920	晩期中葉	円形	102	92	16	×	浅鉢、磨石類	逆位 (浅鉢)、覆土下層	

第 1 表 分析対象資料一覧 (5)

遺跡名	市町村名	遺構番号等	時期	平面形	長径	短径	深度	配石	出土遺物	出土状態・縦位置	その他	文献
大沢谷内北遺跡	新潟市	SKI199	晩期中葉	楕円形	98	56	6	×	深鉢半分、クルミ	破片状態・覆土下層(深鉢)、覆土(クルミ)		前山・伊比ほか2010
		SK317	晩期中葉	不整形	91	82	17	×	深鉢半分	破片状態、覆土中位		
保明浦遺跡	田上町	第5号土坑	晩期後葉	楕円形	85	110	-	×	鉢形破片、石鏃、独鈷石	覆土上層(鉢)	中央に礎石状の石を配置	田畑1993
保明浦遺跡Ⅱ	田上町	SKI1	鳥屋1式期	隅丸方形	85	-	-	×	深鉢破片	不明		
		SKI12	晩期後葉	方形	125	95	-	×	深鉢破片、淺鉢破片、鉢破片	不明		
		SKI13	鳥屋2b式期	方形	125	105	-	×	台付鉢破片	不明		
		SKI15	晩期後葉	円形	100	100	-	×	深鉢大破片	不明		
		SKI16	鳥屋2a式期	隅丸方形	115	95	-	×	深鉢	不明		
保明浦遺跡Ⅱ	田上町	SKI17	晩期後葉	楕円形	110	95	-	×	深鉢破片、淺鉢破片、鉢破片	不明		田畑1996
		SK20	晩期後葉	円形	95	95	-	×	深鉢	逆位		
		SK31	晩期後葉	円形	130	130	-	×	深鉢	不明		
		SK34	鳥屋2a式期	円形	130	130	-	×	深鉢破片、重破片	不明		
		SK35	鳥屋1～2a式期	隅丸方形	130	-	-	×	深鉢破片、結鑿土偶	不明		
		SK36	鳥屋2a式期	円形	150	150	-	×	深鉢破片	不明		
鳥屋遺跡	新潟市	第58号土坑	晩期後葉	楕円形	115	78	28	×	深鉢大形破片、深鉢破片、石鏃、磨糸、石皿片、剃片	外面上・土坑上(深鉢破片)、土器下(石皿片)、覆土(磨糸)		鳥屋遺跡発掘調査団1980

参考文献

伊東 崇 2001『黒川西館』黒川村教育委員会
 佐藤雅一 1988『西倉遺跡』川口町埋蔵文化財報告第2輯、川口町教育委員会
 佐藤雅一・山本 克 2004『町内遺跡試掘確認調査報告書(3)』津南町文化財調査報告書第44輯、津南町教育委員会
 小片 保 1962『越後国室谷洞窟人骨所見』『人類学雑誌』第70巻第2号、日本人類学会
 大島秀俊・藤田亮一・高階敏明ほか 2010『谷地遺跡・八太郎遺跡・田屋道遺跡Ⅱ・宮の越遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第193集、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
 尾崎高宏 2002『黒田古墳群』新潟県埋蔵文化財調査報告書第111集、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
 佐藤雅一 1990『吉峰遺跡』塩沢町埋蔵文化財報告書第12輯、塩沢町教育委員会
 秦 繁治 1993『古町B遺跡発掘調査報告書』吉川町教育委員会
 桐原雅史・斉藤 肇ほか 2008『大坂上道遺跡Ⅱ・猿楽遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第186集、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
 佐藤雅一・原ひろみ 2000『道下遺跡縄文時代編』津南町文化財調査報告第31輯、津南町教育委員会
 本間嘉晴編 1977『堂の貝塚』金井町文化財調査報告書第2集、金井町教育委員会、佐渡考古歴史学会
 小熊博史編 2002『鳥高・三十稲場遺跡』長岡市教育委員会
 岡本 勇 1969『佐渡藤塚貝塚』立教大学博物館学研究室調査報告7、立教大学学校・社会教育講座博物館学研究室
 高橋 保・高橋保雄 1992『五丁歩遺跡・十二木遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集、新潟県教育委員会
 鈴木俊成・寺崎裕助・加藤正樹ほか 1996『清水上遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
 高木公輔・桑原 健・南波 守 2014『布場上ノ原遺跡』魚沼市埋蔵文化財調査報告書第10集、魚沼市教育委員会
 駒形敏朗・寺崎裕助 1981『岩野原遺跡』長岡市教育委員会
 加藤 学・荒川隆史 1999『和泉A遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
 品田高志・伊藤啓雄・中野 純 2000『横山東遺跡群Ⅰ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第34集、柏崎市教育委員会
 佐藤雅一・長沢辰生編 1998『原遺跡』塩沢町埋蔵文化財報告書第18輯、塩沢町教育委員会
 阿部泰之 2008『屋敷島遺跡発掘調査報告書Ⅰ』阿賀町埋蔵文化財調査報告書第1集、阿賀町教育委員会

佐藤雅一・阿部昭典・倉石広太・佐藤信之 2011『堂平遺跡』津南町文化財調査報告書第59輯、津南町教育委員会
 池田 亨・荒木勇次 1988『万條寺林遺跡』塩沢町埋蔵文化財調査報告書第7輯、塩沢町教育委員会
 相羽重徳・藤田 登・田海義正ほか 2013『町上遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第240集、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
 伊東 崇 2003『分野地A遺跡』黒川村埋蔵文化財調査報告書第8集、黒川村教育委員会
 藤卷正信ほか 1991『城之腰遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集、新潟県教育委員会
 和田寿久ほか 1990『下ノリ遺跡』奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ、朝日村教育委員会
 品田高志・中野 純・小山田夕実 1994『柏崎市の遺跡Ⅲ』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第19集、柏崎市教育委員会
 吉沼 亘・角山誠一・吉栗勝弥 1997『野首遺跡発掘調査概要報告』十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集、十日町市教育委員会

佐藤雅一・阿部昭典・倉石広太ほか 2005『道尻手遺跡』津南町文化財調査報告第47輯、津南町教育委員会
 池田 亨・荒木勇次 1987『柳古新田下原A遺跡』大和町文化財調査報告第2号、大和町教育委員会
 折井 敦・大島秀俊・伊比博和ほか 2007『道下遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第174集、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
 渡邊裕之・坂上有紀・加藤 学ほか 2009『野地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第196集、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
 土橋由里子 2005『蛇谷遺跡・炭山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第151集、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
 細跡 喬・野村忠司編 1996『龍峰遺跡発掘調査報告書』中郷村教育委員会
 寺村光晴・青木重孝・関 雅之編 1987『史跡寺地遺跡』青海町
 伊藤秀和 1996『川船河遺跡』田上町埋蔵文化財調査報告書第7集、田上町教育委員会
 細野高伯・伊比博和・立木宏明・前山精明ほか 2012『大沢谷地遺跡Ⅱ第7・9・11・12・14次調査』新潟市文化観光・スポーツ部文化財センター
 前山精明・伊比博和・折井 敦 2010『大沢谷内遺跡第3次調査』新潟市文化観光・スポーツ部歴史文化課埋蔵文化財センター
 田畑 弘 1993『保明浦遺跡』田上町埋蔵文化財調査報告書第3集、田上町教育委員会
 田畑 弘 1996『保明浦遺跡Ⅱ』田上町文化財調査報告書第8集、田上町教育委員会
 鳥屋遺跡発掘調査団 1980『鳥屋遺跡Ⅰ』豊栄市教育委員会